

# 世田谷区「梅丘」の地名由来と小田急線沿線開発

永江 雅和



現在の世田谷区梅丘（Google map より作成）。小田急線梅ヶ丘駅周辺から、南方にかけて位置している。駅北側の羽根木公園と梅丘中学校は区域の外にある。

東京都世田谷区に梅丘という地名がある。小田急線「梅ヶ丘駅」の付近であり<sup>1</sup>、梅丘一丁目から三丁目までが存在する。駅に近い羽根木公園には多数の梅の木が植えられている梅の名所であり、3月に「世田谷梅まつり」が開催されることなどから、この地が昔から梅の名所であり、そのため梅にちなんだ地名が付けられたと思っている人も多いようである。しかし調べてみるとこの地の「梅」の由来は比較的新しいものであったことがわかる<sup>2</sup>。

世田谷区立梅丘図書館に所蔵されている『わがまち梅丘』には、梅丘の由来について次のように記されている。「昭和七年（一九三二）年東京市域の拡大により世田谷区が誕生して、世田谷二丁目と変わりました。そして昭和四一（一九六六）年二月旧世田谷二丁目は、かつての字名（竹の上、前田、松原宿、久保、山崎、北沢窪）を参考に梅丘一丁目と二丁目に分けられました」<sup>3</sup>。

ここで疑問が生ずる。世田谷区梅丘となった地域の旧地名に「梅」の字はどこにも存在しな

<sup>1</sup> 住所名は「梅丘」、駅名は「梅ヶ丘」と表記する。読みはどちらも「うめがおか」である。

<sup>2</sup> 「梅ヶ丘」の駅名が羽根木公園に由来するものではないという指摘は、長年に渡り小田急の歴史を記している生方良雄『小田急の駅今昔・昭和の面影』（JTBパブリッシング、2009年）58頁でもなされている。同書でも後述する『小田急五十年史』の記述が用いられ、「由来は不明である」とされている。

<sup>3</sup> 中野元之編『わが町梅丘』（2003年）3頁。

いのである。羽根木公園についても「六郎次山とか根津山と呼ばれていた」<sup>4</sup>との記載があり、この地が以前から梅ヶ丘と呼ばれていた形跡は見られない。地元住民からも「ここら辺は以前は世田谷二丁目でした。竹やぶが多くて、筍がずいぶん採れたんですよ。春の筍掘りは、子供たちの楽しい遊びの一つでした。その竹の上が、なんで梅になっちゃたんでしょうね」<sup>5</sup>と不思議がる記述が残されているほどである。



写真左：現在の小田急梅ヶ丘駅北口側羽根木公園に向かう道は閑静な住宅街が続く。写真右：梅ヶ丘延命地藏尊。駅南口側に設置されている。戦後同地域で増加した踏切事故の犠牲の供養と交通安全を祈念するため、町内会、婦人会、商店街が協力し、昭和26年に建立された。写真の像は平成16年に小田急電鉄の協力を得て新たに設置されたもの。

地名「梅丘」の由来が不明であるとすれば、駅名「梅ヶ丘」の由来は何なのであろうか。小田急電鉄（当時は小田原急行鉄道株式会社であるが以下小田急の呼称で統一する）がこの地に駅を開設したのは昭和9（1934）年のことである。同社小田原線の開業当初（昭和2年）からの駅ではなく、小田急創業者である利光鶴松の計画にあった東京山手急行線との交差点の駅として追加建設された駅であったという<sup>6</sup>。同駅の名称について、『小田急五十年史』には次のような記述がみられる。まず現在の羽根木公園について、「かつては麦畑の中に一基の古墳があり、出土品もあった。したがって梅ヶ丘は古墳にちなむ『埋ヶ丘』に由来するとの説がある」<sup>7</sup>と記している。つまり羽根木公園が古墳であったことから「埋ヶ丘」と呼ばれ、それが「梅丘」に転じたという説である。これが正しいならば、やはり「地名」→「駅名」の順に名前が付い

<sup>4</sup> 前掲『わが町梅丘』3頁。原文では「根津山」の部分が「根根山」となっているが、誤期の可能性が高いと考え、修正した。

<sup>5</sup> 前掲『わが町梅丘』8頁。小林啓美氏の回想。

<sup>6</sup> 吉川文夫編『小田急一車両と駅の60年』（大正出版株式会社、1987年）120頁。

<sup>7</sup> 小田急電鉄株式会社編『小田急五十年史』（小田急電鉄、1980年）644頁。

たことになる。

しかし一方で同社史には次のような記述も存在する。「また、この地の大地主の旧家に梅の古木があり、同家の家紋も梅をかたどったものであるところから、これをとって優雅な『梅ヶ丘』の駅名をつけた」<sup>8</sup>。これは地元の名士に由来する地名であるということになるが、この場合、地名とは無関係に駅名が名づけられたことになってしまう。つまり「駅名」→「地名」の順である。さらにこの説については、先の『わが町梅ヶ丘』にも類似の記述がある。現地の廣田利雄氏の回顧談として次のように述べられている。「梅丘の辺りはもと『北沢窪』と言われていたんですよ。駅をつくるよう小田急に頼んだ時、六〇〇坪の土地と三人の駅員の三年間の給料を出すように言われましてね。そこで代田耕地整理組合がそれに応えて、その寄り合いが相原さん（元村長）の家で開かれたんです。どんな名前がいいかという話がでて、そのとき庭を見ると立派な梅が満開だったんです。そこで駅の名前を『梅ヶ丘』にしようということになったんです」<sup>9</sup>。このエピソードは先の『小田急五十年史』の記述とも符合する。元村長であり駅設置の意見調整に貢献した地元の地主、相原家の庭の古木がルーツになるという話である。

さらに調べてみると、この相原家の子孫に当たる相原明彦氏が残した文章が地元郷土雑誌『世田谷』に掲載されていることがわかった。当該部分を引用しよう。『『梅丘』という名称は、昭和九年四月一日、小田急線『梅丘駅』新設に当たり初めて生誕したもので、それは相原家（中略）の梅鉢の家紋に由来する。その頃、小田急線『世田谷代田』－『豪徳寺』駅の間際に当たる当駅では、新駅の設置を想定した耕地整理事業が行われており（代田第二耕地整理組合）、故相原永吉は地元有力者（大正九年～十三年間、世田谷町長）として新駅誘致に尽力し、小田急側の了解をとりつけた。新駅予定地は、従来『北沢窪』とよばれていたが、駅名としては不適當とされ、駅開設を前にして電鉄側より相原永吉に新駅の名称について諮問があった。（中略）その頃、新駅に近い相原家借地人であった広重亀一、藤井省太郎、清本専之助の三氏が相原家を訪れ、たまたま新駅名のことが話題にのぼった。三氏は帰路、相原家土蔵の梅鉢の家紋をみて、これに因んで『梅丘』と命名してはとの提案をされた。この案は、相原永吉より小田急側に伝えられ、新駅名として異議なく採用された由である」<sup>10</sup>。

このエピソードは、先の『わが町梅ヶ丘』における説と微妙に相違がある。広重氏らの相原家訪問が、先に紹介された耕地整理組合の寄り合いであったのか否か、現時点では判断が難しいし、「梅」の由来が相原家の庭の古木であるのか、家紋の梅であるのか、微妙な相違であるが、気になる違いでもある。しかし共通点としてあげられるのが、地元有力者で駅誘致に尽力した

<sup>8</sup> 前掲『小田急五十年史』644頁。

<sup>9</sup> 前掲『わが町梅ヶ丘』5頁。

<sup>10</sup> 相原明彦「梅丘の地名の起り」（世田谷区誌研究会『世田谷 第44号』1992年所収）。なお駅名の誤記は史料ママとした。

相原家に由来する「梅」を出発点として、「梅ヶ丘」という名を冠した駅が設置されたということである。つまり「駅名」→「地名」の順であるということになる。今回、地名・駅名決定に関わる一次史料を得たわけではないが、『小田急五十年史』に併記されている、「羽根木山由来説」と「相原家由来説」を比較するならば、現在確認できる二次史料の内容から、後者の方が信憑性が高いという判断を示しておきたい。



写真：現在の羽根木公園。多数の梅が植樹され、駅名に相応しい梅の名所として人々を楽しませている。また開花の季節には「せたがや梅まつり」が開催され、地域の観光資源としても活用されている。

こうして世田谷区二丁目に設立された小田急線梅ヶ丘駅の名称は地域に定着してゆき、戦後昭和 41（1966）年に町名変更の際、駅名に由来した「梅丘」という地名が名づけられたということになる。現在の梅丘一丁目から三丁目はそのほとんどが、羽根木山の存在する駅北側ではなく、駅の南側に広がっている。駅北側の羽根木山公園の住所は代田 4 丁目、梅丘の名を冠する梅丘中学校は松原 6 丁目であり、いずれも地名は梅丘ではない。この点も「梅丘」の地名が羽根木山に由来するというよりも、駅名に由来することの一証左と言えるだろう。

その後羽根木山公園には昭和 42 年に世田谷区議会選出記念として 55 本の梅が植えられ、昭和 46 年に東京府成立 100 周年記念植樹で 230 本、翌年世田谷区政 40 周年記念植樹で 100 本と機会あるごとに記念の梅植樹が行われた結果、羽根木公園は実質的な「梅ヶ丘」として付近の名所となり、毎年 2 月から 3 月にかけて実施される「せたがや梅まつり」には大勢の観梅客が訪れ、賑わいをみせるようになった<sup>11</sup>。

かならずしも梅の名所ではなかった地に、偶然から「梅」にちなんだ駅名が名づけられ、それが地名として定着し、その後、梅の植樹が進み、観光資源化してゆくというユニークな順序

<sup>11</sup> 前掲『わが町梅丘』1 頁。

を、梅丘の歴史にみることができる。近年不動産開発や区画整理の結果、旧来の地名が消滅し、イメージ優先の新地名が付けられることに対する批判が存在する。この「梅丘」という地名は開発に貢献した旧家に因むという意味で完全な創作地名ではないと言えるが、広い意味で古い地名を残さない「開発型地名」に含まれるかもしれない。ただ同地の場合、由来はどうあれ、住民が「梅丘」という地名に愛着を持ち、地名に相応しい街づくりを進めていった点に特徴がある。創作された地名を出発点として地域の人々が街づくりを進めてゆくという開発型地名の一つの可能性を示す事例を、ここから読み取ることができるのである。